
王冥の友達

熱悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王冥の友達

【Nコード】

N6927E

【作者名】

熱悟

【あらすじ】

私立王冥学園。都内で比較的田舎にある学園である。ひねくれ物の少年は、あまりに自分勝手な男や、優しい彼女に、凶暴な不良、詐欺教師という滅茶苦茶な人脈を持ち、またそれに囲まれて変わっていく。笑ったり泣いたり軽くなりきたり学園物語。

第一話 私立王冥学園

「俺にも見せろよ」

やぶから棒に言われた。待て、今何の話をしていた？ 確か学校の帰り道に、二人で歩いて、歩きながら、桜が綺麗だとか、もうすぐ枯れるだとか、花びらがうっとしくて腹立つとかいうちょっとしたブラックトーク？ という奴をしていたはずだ。しかし奴は一瞬の沈黙のあと打ち砕かれ、急にわけのわからないトークになる寸前だ。いや、トークじゃなく、一方的な質問にもなり得る。何故なら、相手はあの藤田幸賞だ。藤田といえば、人の話を聞かないワガママ男子で有名な、B組の「友達」だ。そいつと今、一緒に帰ってる。ワガママな友達と一緒にだ。

とりあえず、一方的に話されるのは避けよう、と、少年は対策を考えながら言い返す。

「何をだい」

少年は目をチラッと藤田に向ける。

「何ってよお、この色男君」

藤田に肩を組まれ、色男君は少々嫌がる。藤田は体が大きく、身長は彼より頭二つ分くらい高い。それ故に、ただのじゃれあいでもズシンと重みが加わって苦しい。

「色男？ ああ、そのことか」

この色男は、とぼけずに言った方がいいなと判断した。どうせ無理矢理言わされるのは目に見えてる。なんせワガママで一方的と有名な人物だからだ。

「彼女できたんだろう？ 見せろよお、古ーい」

彼はこの「古ー」という名前を極端に嫌っていた。呼ばれただけでも不機嫌になるくらいに。何故古いんだと。おかげで、小学校で散々いじめられた。で、不機嫌だからちょっと冷たくする。

「物みたいに言うなよ」

「おー、悪イ悪イ」

藤田は、ムツとする古一を気にもかけずに、がははと大声で笑う。なんてガサツな奴だ。

「春奈のことな？ 今度会わしてやるよ」

いくら藤田でも、人の彼女に手を出すような真似はしまいと思つて、「会わせる」ことを宣言してしまった。漫画で、エリートの冷徹な上司がいたとする。そこに主人公を送り込んで、功績をあげて認められるという展開はよくある。しかし、現実にはそうない。エリートの冷徹上司はきつと、素人の主人公を認めるどころか、陥れて酷い目にあわすかもしれない。彼女を藤田の下に送り込んだとすれば、いわば、そんなことになるかもしれないと思い、後から少し後悔した。

「おう！ 頼んだぞ！ 色男！」

——これだから……僕はコイツが嫌いなんだ。

太陽が沈みかける中、桜並木の中を、彼女も放つて二人で帰っていた時のことだった。

王冥の友達

次の日の朝。

古一は、うーん、とごく一般的な伸びをして、ベットから立とうにも立てない眠気と気だるさと戦っていた。それはそれは激しい争いだった。彼女・春奈のことを考えると眠れず、いつまでも起きていたせいで、第五感が全く機能していない気がする。

だがもう既に、時計は七時半を指していた。目覚ましは数日前に大破し、母にモーニングコールを頼んでいたが、母も寝坊だ。

ああ、父さん。起こしに来てくれ……。と、思いつつ、動けない、春奈の生霊によって金縛りにあつた体を必死に動かそうとしている。

しかし大変なことを思い出した。父さんは出張だった。今頃出雲でグーグー寝ているのだろう。親に期待した僕が馬鹿だった！と、逆恨みを力に変えて飛び起きることに成功した。奇跡だ。

「母さん！ 寝坊！ 今日からパートに行くんだろ？」

自力で起きた古一は、それができない情けない母を助けに走った。制服を手に持つてはいるが、走りながら着替えることはできない。つまり、大きく言えば、着替えより母を謎の金縛りから救出するのを優先したのだ。

しかし母はその行為を無下にし、その時の気分だけで「やっぱやめたあ……」と呟くように言って寝返りを打った。

「朝ご飯は？」

「ダンボールでも食べなさい」

絶対用意していないな、こいつ。絶対冗談で済ませようとしている。ちよつとイラツときた。これは、逆恨みじゃないはずだ。

古一は、ま、もう義務教育じゃないからしょうがないと自分を納得させ、リビングに走りその場で着替えた。カウンターに設置されている籠に、丁度シリアルが入っていた。朝食はこれで済ますしかない、と、古一はその朝食袋を手にとる。スツカラカンだ。こんなくしょう。ゴミを置くな。

何も食べないまま古一は適当に顔を洗い、髪を整え、鞆を持ったら走って家を出た。鍵はしめていない。いや、鍵など知った事かと家を見捨てるように走った。

私立王冥学園。その看板を目にしっかりと捉えたと、そこに向けて全速力で走った。だが、看板の右には、竹刀を持ったスキンヘッドのジャージ野朗が立つ。あの野朗、ドラマに影響されすぎだ。遅刻をわざわざ観賞し、竹刀で叩くサディストプレイを楽しむ気だ。

腕時計はもう七時五十九分。なつたばかりか、なつてから大分経っているのか。あの極細の針を見て見極めるほど、のんびりはでき

ない。

こうなったら走るだけだ。校門まで目測で約百五十メートル。足の遅い僕は、百メートルを全速力でも十六秒かかる。間に合え！
こうなりや叩かれるのも覚悟だ！

そんな危機的状況で、寒気を覚えずにはいられない邪魔が入った。後ろから誰かが走ってくる。自分とは比べ物にならないほど速い。猛スピードで突っ込んでくる巨体は紛れもない……藤田だ。

「よう古一！ お前も遅刻か！？」

「話しかけんなあ！ 今急いでんだ！」

隣まで詰め寄ってきた巨体を振り払うように腕を振って走る。こんなことなら、運動好きな父に言われるがままに陸上部に入部しておけばよかった。

そこで、校門から怒声が響いた。

「あと五秒！」

なぬう！ ふざけるな！ このハゲ！ 心の中で、あのジャージを全然着こなせていない男に罵詈雑言をあびせた。まだ本気で走れば間に合う！

「行けええええエエエえ！」

古一は叫んだ。ラストスパートだ。間に合うか……！

「五オ！ 四！ 三！」

間に合った……と思ったところだ。竹刀野朗は、三！ と言った次に「あ、もう八時だ」と言った。何？ 今なんと言いやがった。

どうやら、時計を読み間違えていたらしい。だが足の速い藤田はもう既にゴールしていて、「すまん古一！」などと叫びながら校内へと走っていった。案の定、古一は、竹刀で散々叩かれた。

第二話 藤田先生

最悪な日だな、きつと。

朝寝坊して、藤田と早朝から会ってしまった。それだけで今日は最悪だと決め付けてしまうのも変なものだが、なあんか嫌な予感があるような気がしなくもないような……。たまにある、曖昧な予感だ。ポイントは藤田だ。

藤田とは、一緒に下校こそするものの、登校時間まで同じくするほど親しくはない。学生にとって、下校が友達と一緒になのは、普通なのだ。部活が終わり、同じ場所から同じ時間にスタートし、家を目指す。ならば、帰り道が途中までも同じというのなら、そこまで一緒に帰るのは必然。しかし、登校は、別々の家から、別々の時間にスタートし学校を目指す。目的が同じでも、出発地点も、時間も違う。よほど家が近くない限り、一緒に登校は、あまりしたくない。

うるさい藤田と、学校に来てからはほとんど一緒だ。クラスが違うからまだ授業中はいいものの、休憩になった途端奴は現れる。疲れるから、登校時間だけは一人で落ち着きたい時間だった。それが今日は侵された。これはきつと、何か悪いことの予兆だ。

朝のホームルームを終え、何もやる気が起きずに、授業の準備もせず机に突っ伏していた。藤田のいるB組の担任、確か、国語を担当している大下先生だ。あいつは遅刻に厳しく、校門には八時までに到達できた藤田も、教室についた時はとくに八時過ぎ。今頃、大下先生に説教でもうけているに違いない。現に今、奴は来ていない。

シリアルのごみを掴まされ、走り、叩かれた疲れをゆっくり座って癒していた時だ。

「どーしたの？ 元気ないね」

目の前に現れたのは、彼女の春奈だった。ああ、君は唯一僕の疲れを癒してくれる太陽だ……、なんて、恥ずかしい台詞を口には出さず、物静かな雰囲気醸し出して、古一は言う。

「ああ、春奈……。おはよう。今日は朝から疲れたよ」

春奈はツインテールの黒髪を揺らし、古一の机の前にしゃがみこむと、不思議そうに古一の顔を覗き込んだ。古一は、目をチラッと太陽に向けたあと、眩しすぎるとばかりに少し顔を離す。

「なにかあったの？」

春奈に問われ、古一は先程のできごとを話そうとして、やめた。

「さつき藤田に会っちゃって最悪だった」なんて言っていると、優しくて純粋な春奈に嫌われてしまう。自分は根暗な人間でも、他人から根暗と思われたくない、ということは、自分以外にもよくある……はず。当然のことなのだと、自分を納得させ、朝寝坊で走って、遅れて、竹刀で叩かれた部分だけを説明した。

説明を終えたところで、一時間目の始まりのチャイムが鳴った。

——ああ……、だるい。

確か一時間目は国語。あの天下先生の国語だ。きっと今までずっと説教。B組からここE組まで歩くと、国語の準備をするくらいの時間はあるだろう。「あ、バイバイ」と言って、春奈は、少し離れたところにある自分の席に向かった。春奈も準備はしていない。だが、きつと大丈夫だ、と、思った瞬間だった。

ズシン、ズシンと音が鳴る。確か、休憩に入った途端いつも聞いていた雑音だ。嫌な予感、的中してしまったみたいだ。

「おーしお前ら、国語始めんぞー」

藤田……。何故お前が入ってくる。意味がわからない。帰れ。今なら授業に遅れずに済むから！ 大丈夫だから！ チャイム鳴っちゃったけど、今、速く教室に戻れば、先生もきつとわかってくれるから！ ていうか、大下の奴はどうした。藤田を見逃しおったか！ 使えんやつめ。と、心の中で深く叫んだ。

「今の時点で国語準備してない奴、前に出なさい」

はあ？ いやいやいや、何故そのままお前が仕切る。大下先生を監禁したってか。代わりにお前が授業するってか。クラスはざわついて、目立ちたがりな男子グループが、藤田に暴言を投げつけたり、笑ったりしている。ガキみたいだ、と、古一は心の中で鼻で笑った。藤田はそれを完全無視。たまたま古一と目が合つて、あ、古一、準備してないじゃん、と、手招きした。

これは行かなきゃいけないのか？ 行つた方がいいかな？ 行かないと、ノリが悪い奴だと思われそうだ。何故か、さっきまで馬鹿にしたり、笑いまくつてたりしていた奴らも皆、藤田にのつて、こっちを見ている。

困っている古一を、なんとかして助けようと、動いたのは春奈だ。あの人は控えめな性格だから、前に出るか、出ないか困っているんだと。察した。

「ふ、藤田君。私もです」

苦し紛れのひと言だった。古一は春奈に感謝したが、それなら、なんで先生面しているのかと文句をつけてほしかった。いや、でもそれで、周りから春奈が敵視されるのもいかなものだなと、後から思う。

「え？ ああ、君もか。じゃ、一緒に出てきなさい」

藤田に言われるがままに、二人で前に立った。チャンスだ。藤田に質問する。

「な、なあ藤田。お前なんで国語やろうとしてんだ？ 大下先生はどうしたんだよ」

微妙に震える声で、古一は訊く。え？ と藤田は言い返し、ゴホンと咳払いした。

「大下先生は、二年の人から金の取立てされて、どっか行つた。それをお前らに報せるよう言われてきた。まさか、本当に前に出るとは思わなかったけど」

——やっぱり出なくていいノリだったのか。

「藤田君、冗談にしてはちょっとやり過ぎだよ！」

——いや、そこで食い下がらなくていいから！ とりあえずここは大人しく戻ろう！ 愛想笑いふりまきながら席に着こうって！ 春奈、危険な真似をするな！

「はっはっはー。席着いていいぞ」

よかった。春奈は何も起こさずに済みそうだ。と、思っで一安心したときだった。

「あ、そーいや、お前の彼女ってこいつ？」

背中に、ツーンと寒気が走った。悪事を働いたとき、作業中に、背後に人が立っていたみたいな感覚が、背中中に走った。

教室全体から、やっぱりそうなのか、お前ら付き合ってたのか、彼女いないとか言ってたくせに、この地味カップルが、逝ってヨシ、と言っ言葉がチラチラ聞こえてくる。古一と春奈は、藤田の方に目を向け、開いた口が塞がらない表情で睨んだ。

隠してたのにこのやろう。目立ちたくなかったのに。藤田の野郎、あっさり言いやがった。もともと、C組の幼馴染の小笠原退助にだけに明かした三人だけの秘密が、何故かコイツに知れ渡り、そこから今、クラス全体に知れ渡った。

黙りこみ、ただただこつちを睨む古一を見て、藤田は、あ、もしかして言っちゃいけなかったか、と、さらに気まづくなる台詞を連発してきやがる。もうダメだ。

「う、うん。何、皆知らなかった？」

ここは開き直るしかない！ と、古一も春奈も目で合図し、言う。

「そ、そーよ！ いつも一緒にいたし、皆知ってるでしょ？ とつくに。隠すつもりだったけど」

「いや春奈、そこは言わなくていいから！ 元々隠してなかったって思わせ……」

古一適にかなり小声で注意したはずだ。でも、一番前の席の奴には聞こえた。隠してたのか！ と、それを聞いた奴が言いやがった。「えー？ 隠してたことを隠すの！？」

春奈ア！ 君は天然すぎるよ！ でも可愛いから許す！

心の中で叫び、そのまま古一は床に倒れた。教室が大きくざわめき、藤田と春奈の、古一を気遣う声が、気を失う寸前に、古一の、ボンヤリした頭に響いた。

第三話 不良

——ここはどこだ……？

目が覚めた。天井が見える。これはきつと、あれだ。少々ありがたいな展開で、藤田と春奈が二人で保健室に運んでくれた的なものだろう。うん、そーだな、と、古一はまた勝手に納得して、重い体をベッドから起こした。

それにしても、この展開で、様子を見てくれていた彼女とか、保健室の先生すらないというのはどういう事だろう。自分は気を失った。それを、二人で保健室に連れてきた。すると、その内片方は、ベッドの横で様子を見ていたことではないのだろうか。ドラマの中だけの出来事で、実際は、もうさっさと教室に戻ってしまっているのだろうか。少し、残念だった。

でもだとしたら、先生はどこだ。職員室かどこかで仕事でもしているのだろうか。まあ、寝ている人間の隣にいつまでもいてもしょうがないし、それなら仕事するわな、と、古一はベッドを降りる。ベッドを降りると、すぐそこに小さなテーブルがあった。そのテーブルの上には、黄色い紙切れが一枚置かれていた。紙を手に取り、小さな文字を読んでもみると、やっぱりあれだ。保健室になんて殆ど来たことのない古一は、遠目に他人のを見ることしかなかったが、あれだ。病状とか、怪我の種類とか、色々書いて保健室に持っていくやつだ。始めて見た……、と、古一は思ったことをそのまんまつぶやく。紙には、病状、と書かれており、その横にズラズラと病気の名前が書かれている。風邪、目まい、蕁麻疹、わからない、などだ。最後に、「その他」蘭があり、そこに丸がされていた。「その他」の横の「」には、「過労死」と殴り書かれている。いや、死んでないから。過労でもないから。と、古一は心の中でツツこんで、その紙を握り締める。

チラッと時計を見る、ことはできなかった。時計がない。設備の

悪い保健室だ、と、舌打ちをして、古一は職員室に向かった。

その道中だった。

保健室と職員室の間には渡り廊下があり、そこを渡って左に曲がればすぐだ。別に授業に出たいわけでもないし、朝、失われた自由時間を取り戻そうと、ゆっくり歩いた。だが、それも長くは続かなかった。

渡り廊下に差し掛かった時だ。「ざけんなコラア！」と大声が、唐突に、渡り廊下に響いた。一瞬ビククリしたが、すぐ立ち直って、そっちを見に歩く。好奇心という奴だ。同時に、だるい教室に行くまでの時間稼ぎでもある。

古一がひよっこりと顔を出した。見えないように、こっそりと。するとそこに見えた光景は、赤ジャージに、金髪。右手に白ボールペンを持った男。その向かいに立ちふさがるのは、紛れもない、我が学園の保険の先生だ。

「ふざけてるのはどっちなの。授業サボってこんなとこにいたと思ったら、白いボールペンで、煙草こっこでもしてたの？」

いやいや、ボールペンで煙草で。いい年こいて、それはないだろう。と、クスクス笑いながら、古一は、保険の先生の方をじっと見る。

「わ、悪イのかよ！ 最近はよお、サウスポーだかなんだか知らねーが、自販機で煙草買えねーで……」

凶星！？ と、古一は思わず吹いてしまった。おかげで、隠れていたことがバレた。保険の先生が気づき、あら、起きたの、と言う。不良も振り向き、ため、何覗いてんだこの変質者コラア、と、古一を指差す。

ヤベ、と思った古一だったが、この不良は相当馬鹿だ。上手くおだてれば問題ないだろうと、素直に姿を現した。二人はそれを無視して、言い合いを続ける。

「とにかく、いい年して、そんなことするのはやめなさい。モテな

いわよ」

先生はしれつと言う。そして、ポケットから煙草を取り出す。見せ付けるように、ゆっくりと取り出し、ゆっくりと火をつけた。不良は、その火に顔を近づけて、動く度に目で追って、うらやましそうな顔をしている。

「っがねーじゃねえか。こっちは煙草吸いたくてうずうずしてんだ。何がサウスポー……」

ブーツ！ また吹いた。二人は一斉に古一の方を向く。

「何がおかしいんだデメエ」

何がおかしいかと聞かれても、と、口を押さえてハマツたように笑っている。サウスポーってなんだ。格闘技？ それとも野球ですか？ 考えるほど笑えてくる。そして、今思ったことをそのまま口にした。

「な……っ！？ え、確かサウスななんとかって……」

一番ダメな展開だ。「ポ」しか合っていないのに、その肝心な「ポ」を抜いてしまった。これは大失敗だ。また、追い討つように笑いがこみ上げてくる。

そこに横から口を挟むのは先生だ。

「サイエンスカードじゃなかったかしら？」

この人、嘘を教えたぞ、今。やはり、この学校にろくな先生はいないのだろうか。

「おお、それぞれ。どっかで聞いた響きだな」

古一は啞然とする。聞いたことあるのは、「サイエンス」と、「カード」をバラバラに聞いただけじゃないのか。しかも、今度もさりげなく「サ」しか合っていないのに納得してしまった。

古一も、この不良に、本気で嘘を覚えられては困る。いつか発覚したときに、キツイ仕返しを受けるかもしれない。だから、古一は否定しようと、え、あの、と、言葉にならない言葉を連呼するが、二人は聞きやしない。

「なあ先生、サイエンスカードはどうやってたら手に入るんだ。もう

我慢できねえ。サイエンスカード貰ってくるわ」

先生にそれを訊くとは、やっぱり馬鹿だ。先生がそんなこと教えるわけがない。

「女装して、煙草屋に行つて、奥に上がりこんで、お前なんて大っ嫌いだ！ と叫べば無条件に煙草がもらえるわよ」

先生も先生だな。ウン。もういい、やめた。僕はなにも言っていない。そもそも、僕に怒りの矛先が向くわけないのだ。と、言葉を発するのをやめた。古一がふっと一息つくと、歡喜の声をあげていた不良が、早速行ってくるわ！ ダメだったらお前のせいだからな、小僧、と叫び、走り去っていった。

え？
……俺？

第四話 諭吉の闇討ち

ああ……。今日も、なんか嫌な予感がするぞ……。

桜の舞う一本道を歩きながら、一人憂鬱に染まっているのは古一だ。

ここ最近いいことがない。彼女の春奈がドジして、クラス中に二人の正体がバレた。春奈は、やっぱりかわいいから許す！ そんなところも含めて好きだよ！ と言うところだが、残念ながら、ゴジラ野朗は可愛くもなんともない。もとはといえば奴のせいだ。奴が急に教室に入ってきて、悪ふざけに、子供みたいに、授業を始めようとさえしなければ、こんなことにはならなかった。

ブツブツぐちぐち呟きながら、古一は下を向いて歩く。落ちた桜の数は、昨日より少し減っているように見える。錯覚だろうか。きっと、もう春もだんだん終わりに近づいてきているのかもしれない。ふと、木の様子を見てみると、顔を上げた時だ。

「君！ 危ない！」

声が聞こえた。おじさんのような、聞き覚えのある叫び声。何かと思つて背後を振り向くと、急に視界に、誰かの顔が映った。

福沢……諭吉……？

バサッ！ と音を立て、諭吉さんは古一の顔面に激突。古一は倒れこんだ。

「おい、大丈夫かね」

男の声がした。大丈夫じゃないです！ と、起き上がって、イラつき気味に叫んだ。何故、背後から札束が飛んでくるのだ。しかも諭吉。かなり分厚い。

「勘弁してくれよ。この頃風邪強いんだから」

今注目すべき点はそこではないだろう、と、ボソツと呟いて立ち上がる。制服についた沢山の桜の花びらをパンパンと叩き落とすと、束を拾って、男に差し出した。

「ど、どうぞ」

男は咳払いをすると、どうも、ごめんね、と、なかなか渋いおじさんのような声で言う。その声のわりには、まだ若々しい二十代くらいの男だ。古一が、それじゃあ、と言って、立ち去ろうとしたときだ。

「君、王冥学園の生徒だね？　急がないと遅刻だよ？　あと五分で八時だ」

男は、袖をまくり、右手の腕時計を見ながら平然と言う。古一は、嘘！？　と、びっくりして、すぐさま走り出した。今日は早く出たはずなのに、おかしい、と、心の中で連呼しながら。

古一が走り去るのを見送り、男は、にやりと笑った。

ダダダッ、と、コンクリートを蹴り、校門を真っ直ぐに駆け抜けた。突っ立っていたジャージサティスト男は、セーフ、と、大声で言う。よっしゃ、間に合った！　と古一は、息を切らし、一旦止まり、歩き出した。階段を上り教室に入ると、おかしい。

「あれ……、まだ、四十分じゃないか……」

黒板の上にかけられた電池時計は、七時四十分を指している。教室にいるのも、早い女子が一人しかない。状況がわからないまま、とりあえずは席に鞆を置き、溜息をついた。

すると、毎日一番に学校にきている元気な女子が、まるで人を待ち焦がれていたかのように、名前以外知りもしない古一に大声で挨拶してきた。

「おはよう！　新井くんっ！」

暑かしい……。華やかだが暑かしい。かわいくないというわけではない。でも、今、古一は春奈以外頭にならない。春奈以外に声をかけられても、何も嬉しくない。適当にあしらおうと、おはよう、と、小さい声で言ってそっぽを向き、鞆から教科書やノート類を取り出し、机に詰める。それでも、女子は食い下がる。

「新井くん、今日早いねえ」

笑顔で話しかけてきているようだが、顔は一切見ない。見てはいけない。まともに、話してはいけない。うつとおしいからだ。

「ていうか私の名前、覚えてくれてる？」

まずい、質問された。これは、うん、うん、じゃ回避できないパターンだ。だが問題ない。古一は今までもこういうことが何度もあり、質問されても、嫌われない程度に回避する術を知っている、と、本人は自覚している。

「確か、山田……さん？　だっけ」

とぼけた口調で、黒板の右上に張ってある出席番号・氏名の表をチラチラ見ながら言う。小さな声で。山田は、覚えてくれたんだ、と、喜んでみせる。無邪気な笑顔にすら、嘘の存在を感じる。なんか、つままないな……人間って。

新井 古一は、改めて思った。

第五話 ピンチっぱい時

すぐ隣で、さっきまで知りもしなかった女子がごちゃごちゃうるさく喋っている。この女子、山田には、「出席番号最後の人」というイメージしかなかった。まあ、別に知りたくもなかったわけ。

古一は、うん、へえ、と適当に流しながら、僕トイレ行つてくると、勝手に去つていった。もちろん、トイレに入りこそしたものの、なんにもせずにただ窓から外を眺めていた。

誰が来るかな……、と、古一は暇つぶしに、予想をたててみた。誰が早くて、誰が遅いか。山田の話では、いつもは何故か、B組の大下先生が真っ先にきて挨拶をしてまわるという。山田以外には、他のクラスにちょこちょこ生徒が散らばってるぐらいで、それ以外の誰よりも早く教室に来るらしい。大下先生については、遅刻に厳しく、金銭関係でたまに生徒とモメるということしか聞いたことがなかったから、だらしない先生と思っていたが、意外に慕われているかもしれない。

ここから、まず来るのは大下先生だろうと考えた。

二番目は誰だろう。藤田……は、いつも遅刻ギリギリで来る。二番はありえない。むしろ最後だろうと思っておいた。とするとやっぱり、わざわざこんな早くにくる変わり者もそういないし、多分、学級委員とか真面目な奴がくるんじゃないかな、と、夢想しながら、この遊びに飽きてきた。こういう暇つぶしの思いつき遊びは、結局何をすればいいかわからずにだらけてしまうものだ、と、古一は頭の中で他の皆と自分を同じにする。そんなことを考えてるうちに、校門に人影が見えた。

「おっ……、誰だろ」

古一は少し体、のりだし、校門の方をみた。目に入ってきたのは、どこかで見た顔。赤ジャージに、金髪。右手に謎のカードを持った細身の男だ。お気づきだろうが、あの時の不良だ。保健室から職員

室に移動する時、渡り廊下で煙草ごっこをしていた不良。そういえば、古一は彼の名前も学年も知らない。でも、知りたいわけでもない。

それにしてもあの不良の歩き方、方を揺らし、カードを持つ腕を前後に振り、口許は僅かに動き、何かブツブツ言っているように見える。あれは明らかに、イラついている。理由は、なんとなくわかる。

古一は、あの不良が最後に言っていた台詞を思い出した。

——ダメだったらお前のせいだからな、小僧。
なんか、物凄く嫌な予感がした。

第六話 恐怖教師（前書き）

謝罪です。長い間更新できず、すいませんでした。これからまた更新できるようにしたいと思います。本当に申し訳ございませんでした

m (((m

第六話 恐怖教師

「ぐわあ……」

逃げる。とりあえず逃げるしかない。あのヤンキー君の正体なんて知らないが、長身だし、あんな不良感丸出しな人、同じ学年にいた覚えがない。というかまず、古一は一年生だ。これより下の学年はない。それだけでもう、立ち向かうのは無謀だ。逃げる。

しかし、古一がトイレのドアをゆっくり開けるとそこにいたのは奴だ。ミス・寂しがり。山田である。

「あー新井君。どしたの、なんか顔が少し焦ってるような」

なんとなく歩いていただけのように見せかけて、多分トイレの前をウロウロしていたのではないだろうか？ いや今はそんなことどうでもいい。急いでるんだ、と言いつつ残し、古一は教室へと走って行った。

教室。とりあえず教室にいれば、奴は来ないはずだ。トイレと距離があつたので、少し息を切らして窓を見た。もうあの不良はいない。少し緊張しながら、少しの間外を眺めていると、後ろからゆっくり声がした。

「おい小僧」

あらビックリ。背筋が凍った。振り返ると、いたのはあの男だ。古一君大シヨック！ このまま背筋が凍りついて死にたい、と一瞬思ってしまった。

「え、ど、どちらさまですか」

苦し紛れの嘘。終わった。ここで正直に言って話し合い……、ということはできなかったのだろうか。嘘をついた時点で、バレたら殴られる。決定。残念でした。

「俺は二年特別支援学級の増田健蔵です。新井古一君いますか」

あらまあ礼儀正しいことで、と関心したくなった。でもない。

ていうかもはや、ツツコミたくない。自分のことを忘れているのは、馬鹿っぽいからいいとする。それで何故自分の名前を知っているのか。ああ、もしかしてエスパー？ と、心の中でギャグを言って落ち着こうと試みたが、失敗。

「新井君はその人ですよ」

でた。山田。後ろから増田の背中を叩き、古一を指差す。増田は、ですよ、と言って、古一に怒鳴りかかった。

「おい小僧、お前のせいで俺は大恥かいたぞ！ どうしてくれるんだ」

「ごめんなさい、ごめんなさいととりあえず謝る古一。それを横から見ていて、山田がまた口を出す。

「新井君が何かしたんですか？」

普通の声で聞かれ、増田も冷静になり、言った。

「こいつが教師と結託して俺を騙し、世間の目と、煙草屋の機嫌を最悪にしました」

「え？ もしかして本当にやったんですか？ ただ間違いに気づいたとかじゃなく、やって初めて気づいたんですか？」

「そうとも、どうしてくれるコルア」

「ていうか世間の目って、どうしてですか？」

「女装して町歩いたらそうなるだろ」

この人は本当に馬鹿なんだな。と、納得した。とりあえず、自分に否がないと主張したら、あっさり帰ってくれた。簡単すぎておかしいと思いつつも、とりあえずはホッと胸をなでおろした。

そこに、保険教師がきた。

「あれ？ ねえ、ここに増田君来なかった？」

と聞かれ、きましたと答える。

「うふふふ。頑張ってたね」

と言われた。恐怖を感じた。

第七話 最悪コンビ・出会う

このところ不幸続きな気がする。いや、そうでもないか。春奈がいれば、きっと不幸は忘れられると思い、今日も学校へ向かう。

いやでも、待て。まず、春奈と静かに会うことができるのか？

昨日は結局、周りからザワザワ言われて、気まずくて、二人で話すことができなかった。このまま自然に消滅？ 嫌だ。あんなくたらない連中に、愛する春奈との時間を消されるわけにはいかない。

頭の中はそれ一色。枯れてきた桜を見ながら学校へ向かうのだった。

また会ってしまった。今度は、嫌な奴が二人コンビを組んでいやる。王冥学園は、正門を入れて右に真っ直ぐで特別支援学級の小さなコンクリートの建物がある。対して、左に真っ直ぐ歩いて校舎に向かって前進。少し奥にA組、B組の下駄箱がある。つまり、B組の入り口と特別支援の教室は対極。なのになぜ、藤田と増田が一緒にいる。

「あの、何やってんの？」

C、D、E組の下駄箱の前で喋ってたので、避けては通れないと思ひ、話しかける。

「おー古ー。この前は悪かったな、ウン」

「おい小僧、こいつ知り合いかあ。この野朗、人にぶつかつていて謝りもしないんだぞ。嫌な奴だよな」

藤田の適当な謝罪はいいとして、この増田だけは意味がわからなかった。見た目不良。肩がぶつかって怒るタイプだ。で、藤田を怒っている……ようには見えない。言葉が優しすぎる。平和主義の不良か？ 普通こういう場面だと、「どこ見て歩いてんだコラア！」と、怒鳴りつけるくらいするはずだ。

「お前がぶつかってきたんだろ？ 俺は前向いて歩いてたぞ」

藤田が言う。その人一応先輩だぞ、と、心の中で注意する。

「なんだと、俺だって真っ直ぐ前見て歩いてた」

増田も言う。

「待て、なんで二人とも前見て歩いてたのに、ぶつかった」

「多分、お前が漫画読みながら歩いてたのが原因だろな」

じゃあ君が悪いんじゃないか、藤田。やっぱりこいつはワガママ君だ。

藤田に、控えめに指摘すると、やむをえず彼は謝った。なんかこの二人似てる、と思った。

「まいーや、許してやるわな。それより小僧、あの保険ばーちゃんはどこだかわかる？」

「あ、あの先生は保健室にいると思いますよ」

「な、なんでわかつたんな……？」

「そ、そりや保険の先生ですから」

古一の言葉を聞くと、増田はナルホド、と手を叩き、お前頭いいな、と言いついて保健室へ向かって歩いて行った。

それにしても、今日は朝からやな奴ツートップに会ったのに気分がいい。自分の意見を、藤田に素直に言えた！これは快拳だよな。そう思いながら古一は四階へ上がった。階段がしんどい。運動部に入れば体力もついてかつこいいだろうか、と思う。春奈は帰宅部。古一は今新聞部にいる。もっとも、たまにしか行っていないが。

四階。E組の前に、もう藤田が待ち受けていた。さっきの位置から互いの教室まで、距離的には、古一の方が断然近かった。なのに何故、藤田はB組みに行き、鞆を置き、E組みまで先回りできる。どんなに足が速くても普通不可能じゃないだろうか。E組の下駄箱からB組の下駄箱に行き、上ってからE組みまでくるのは滅茶苦茶遠回りだ。

「でさあ古一、あれがああ春奈とかいう子か？ん？」

こいつは全く反省してないな、と思う。

「そうだよ。君のせいで話しづらくなったけど」

「そっか、じゃあ、俺がまた話せるようにしてやろう」

結構です、ごめんなさい。と、言いたかったが言えなかった。二度目の快拳は結局起きず、再び藤田にかき回されることになった。

僕はまだ、春奈と別れたくないよ……。心の中で、嘆いた。

第八話 ある意味最強

「今日もまたまた憂鬱。」

藤田の奴……。いい加減僕にかまわないでくれ、と言いたかったが、残念ながら、もう快拳を起こす気にもなれない。藤田に反論なんてしたら、何をされるかわからない。あいつはなにしろ、ワガママで妙に怪力が評判の藤田だ。そういえば、藤田は何部だろうか。多少気になるが、まあ、放っておこう。

早速きた。諸悪の根源藤田だ。

「よう古一。今日はお前のために早起きしたぞ」

優しさの押し売りってこういうことか。君んちの目覚まし時計を壊しに行きたいよ、と、心の中で呟いてみた。

「今日はな、俺がちよっと仕組んでやったぞ。お前のガールフレンド君をだな……」

言つと、藤田は耳元でゴニョゴニョと計画を言ってきた。この計画は、藤田にしては上出来だった。だが残念ながら、実行する気はない。その計画には少し無理があった。

「無理だよ」

言つ。しかし、藤田は食い下がる。

「じゃ俺がやってやる」

「や、やめろって」

「やめない。大丈夫、絶対成功するさ」

昼休み

E組の教室の前に、藤田が立ちはだかる。出入り口の前でくつちやべってる女子達の背後に、なにやら凄い威圧感で仁王立ちしている。気づいてない女子たちに、藤田が、おい、と話しかける。女子達はビククリする。

「藤田君。なんですか？」

何故に敬語か、というのは置いておこう。

「ちよつと夏目を呼んできてくれ」

「はい」

女子の一人が春奈を呼んだ。春奈は、相変わらず自分の席に座って妙に緊張していた。女子の呼びかけに反応し、小走りで入り口に向かう。古一もそれに気づき、あの野朗、始めやがった、と、コッソリ見る。

「なあに……て、藤田君！？」

これもビックリ。藤田がくると、皆ビックリする。

「何かな？」

しかし気をとりなおし、普通に話す。

藤田は、重い雰囲気を一転させ、明るい顔できりだした。

「夏目。君は帰宅部だったな？」

「うん」

「なんで部活に入らないんだ？」

「いや、それにはいろいろ事情が……」

「よし、新聞部に入りたいけど入るのは恥ずかしかったんだな？」

「は？」

待て。きりだし方がおかしいぞ？ のつけから。これは案の定、

春奈を古一のいる新聞部に入部させようという計画である。でも残念ながら、藤田に任せたのが間違いだった。そんな言い方で、入るわけがない。もうその策戦は諦めろ、藤田。

「実はね、私が部活に入らない理由は……」

「なんだ？」

「その通りなんだよね。新聞部って男子しかいないらしいから」

驚きと喜びが入り混じった瞬間だ。初めての感覚だね！ 嬉しいね！

「何言っただ、新聞部には女子も古一もいるじゃないか。よし、入部決定！」

そう言つと藤田は、勝手に入部届けにはんを押し、入部させてしまった。

君がワガママでよかった、藤田。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6927e/>

王冥の友達

2010年12月9日01時22分発行